

**平成29年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」  
事業実施報告書**

**【宮城県】**

1 実践テーマ	Ⅲ スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 障害について理解し、心のバリアフリーを生徒に浸透させる
2 実施対象者	宮城県柴田高等学校 2年生 体育科 40名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ①教科名 体育（スポーツ総合演習）
4 目標 (ねらい)	<p>世界的なスポーツの祭典であるオリンピック・パラリンピックについて知識を身につけるとともに、障がいの有無にかかわらず、全ての人々が、同じ社会に生きる人間として互いに正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていく力を身に付けることは、非常に重要である。</p> <p>障害者理解の学習や障害者スポーツの体験、障害者との交流を行うことにより、障害者理解を深める教育を推進し、障害を理解する「心のバリアフリー」を生徒達に浸透させる。</p>
5 取組内容	<p>1 オリンピック・パラリンピック知識定着を図る</p> <p>(1) 近代オリンピックの創始者である、「ピエール・ド・クーベルタン生誕150周年記念改訂版」DVDを視聴しクーベルタン氏のスポーツへの想いとオリンピックの価値である「世界平和」「卓越」「友情」「敬意・尊重」そして、バランスのとれた「知・徳・体」についても理解しました。また、スポーツの価値についても、更なる人間の高みを目指し努力する姿勢を学びました。</p> <p>(2) 日本のスポーツの父と呼ばれる、嘉納治五郎氏の「嘉納治五郎～スポーツを通じた人間教育」を視聴し嘉納治五郎氏のスポーツは人間教育の場であるという考え方から、「精力善用」心と体を最も効率的に使うことや「自他共栄」他者への尊敬の心を持ち自分だけではなく他者と共に栄える世の中を作ること等を理解しました。</p> <p>&lt;生徒達の感想&gt; (一部抜粋)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・古代オリンピック種目が変化して、近代オリンピック種目になっていることが分かった。</li> <li>・古代オリンピックでは、女性は大会に参加できないことが分かりその頃の世相などが読み取ることができた。現代では考えられない。</li> <li>・嘉納治五郎氏とクーベルタン氏は、スポーツに対して同じ考え方をもち、スポーツをとおして人間形成や他国との交流など、現在のスポーツにもつながっていることが分かった。</li> </ul>

## 2 障害体験学習

障害者の方々は、様々なハンデを抱えながら生活をしている。体験を通して、その方々の理解を深め社会の形成者の一員として積極的に関わることができると考え、アイマスクを着用し視覚障害体験を行った。

(1) 2人1組になり1人がアイマスクを着用し、サポートされながら体育館内や階段、廊下を歩いた。

最初は、アイマスクを着用するだけでも、光を失い不安になっていたが、パートナーのサポートにより不安を解消することができたようだ。何度か行っているうちに声だけでも安心して歩行ができるようになった。

### <生徒達の感想> (一部抜粋)

- ・視覚障害者の方は、毎日この状況で生活していて大変だと思いました。
- ・一步一步、歩くのがとても怖く感じました。目が見えないということは、とても大変なことだと思いました。
- ・普段は感じたことはないが、突然目の前に物があるように感じたりして、一歩足を前に出すことさえ勇気がいることだと思いました。
- ・パートナーの声がないと自分が今どこにいて周りに何があるのか全く理解できませんでした。
- ・今回は、ある程度分かっている場所だから予想ができたが、分からない場所で最初から見えない状態であったら、もっと不安になると思いました。
- ・視覚障害者の方々は、周りで急に大きい声を出されたり、ぶつかって来られたらびっくりすると思うので、思いやりを持って接してあげなければならないことが分かりました。
- ・視覚障害者の方の立場になって考えると、優しく声をかけてあげたり、困っているときは助けてあげたりすることが、私たちにできることであることが理解できて良かった。
- ・声をかけてもらったり、手を貸してもらおうとありがたいと思った。
- ・パートナーに段差や階段の高さや位置等、一つ一つのことを細かく説明してほしいと思った。
- ・耳からの情報しかなく、できる限り視覚障害者の方の目になってあげたいと思った。

### 3 ブラインドサッカー選手との交流会・実技指導

(1) 日 時 平成29年12月15日(金) 13:40~15:30

(2) 場 所 宮城県柴田高等学校

(3) 会 場 第2体育館

(4) 講 師 ブラインドサッカーチーム コルジャ仙台

代表 浦 澤 真 人 氏

選手 伊 藤 慎 哉 氏

選手 高 橋 伊 織 氏

(5) 参加者 本校2学年 体育科 40名(男30, 女10名)

(6) 内 容

1) 開会行事

2) アイマスクを着けてのグループ学習

3) ブラインドサッカーの実技指導

4) 伊藤さんのお話(視覚障がい者)

5) 閉会行事

以上の内容で交流会を行いました。始めにアイマスクを着けてのグループ学習を行い、慣れることができ視覚障害者である伊藤氏と交流することができました。また、ブラインドサッカーのルールを説明してもらいました。コーチやコーラーがボールの位置、シュートを打つ方向や角度などを細かく指示をだしアイマスクを着けた選手を動かし、ゴールマウスにシュートを打っていました。伊藤氏に見本を見せていただきそれを参考に一人一人がシュートしましたが、コーラー役の生徒の指示が聞こえなかったり、適切ではない指示であったりすることで選手が混乱する場面もありましたが、徐々に慣れてきてドリブルやシュートを決められる選手もいて上達しました。



<交流会を終えて生徒達の感想> (一部抜粋)

・ブラインドサッカーでは、友達や指示を出してくれる人がいるが、普段の生活では1人で生活している。それが当たり前ではあるが光がないときには不安だと思う。そんな時に声を掛けてあげられれば安心すると思うので、力になりたい。



・目が見えない人達にとって音はすごく大事なものだと思いました。

・スポーツは目の見えない人や障害を持っている人、持っていない人でも同じく楽しくできる、すごいものだと感じました。



・ボールの音と指示を聞いただけで、シュートまで打てるのはとてもすごいと思った。自分達もやってみたけれど、かなり難しかった。また、機会があればやってみたいです。

・アイマスクをして、視覚障害者の方と同じ立場になり様々なことに気づかされました。真っ暗で何も見えず声と音だけで動くことがどれだけ危険なのかを知りました。障害者のみなさんがスポーツを通して、障がいの有無にかかわらず楽しめることができたらいいと感じました。

・声に出して相手に伝える難しさと相手の話を正確に聞き実行することの難しさを改めて実感することができました。

・授業でも実際にアイマスクをつけて歩いたりしていましたが、今回は助けてくれる人が周りにいない環境で行動したグループワークは少し恐怖心を感じました。

・今まであたりまえに見えていたもの全てが見えなくなることの怖さを感じました。この交流会に参加してパラリンピックやその他のパラスポーツに興味を湧きました。

<伊藤氏との交流での感想> (一部抜粋)

- ・伊藤さんのように最初から目が見えない人は暗いのがあたりまえの生活になっていることが分かりました。
- ・目標を持って頑張っていてすごい。視覚以外の感覚を上手く使ってプレーしていて素晴らしい。
- ・私たちはブラインドサッカーでアイマスクをしてプレーするのが怖かったけど、伊藤さんは、「普段の生活よりサッカーのフィールドの方が安全に思える」と言っていました。普段の生活が安全に生活できるように私たちができることをこれからは考えたいと思った。
- ・目の見えない人に「あっち」「こっち」といってもどこか分からないので、一緒に手をとって歩いてあげることが不安も無くなるし、安全なことだということが分かりました。
- ・目に障害を持っていても人生を楽しく生きていけている伊藤さんは本当にかっこいいと思いました。
- ・目が見えなくても一生懸命スポーツをやる姿に感動しました。私も伊藤さんに負けないくらい一生懸命プレーしたいと思いました。
- ・自分達がこうして自由に動いたり、見たり、話したりできると言うこと、好きな競技を続けられていることをあたりまえだと思わずに、感謝しなければならないと感じました。
- ・伊藤さんは精神的にも強いと感じました。
- ・伊藤さんは、光のない世界で生活していることは、自分にとってあたりまえのことと言っていました。そういった障害と真っ直ぐに向き合っている伊藤さんを見て、光がある私たちは、障害を持っている人たちに対して少しでも理解する気持ちを持つべきだと感じました。
- ・交流会を通じて伊藤さんから元気づけられた部分もあり、改めて障害を持っている人達のサポートをしていこうと思いました。
- ・伊藤さんのように目が見えなくても、いろんなことにチャレンジする心を見習いたいと思いました。



<p>6 主な成果</p>	<p>本研究により、世界的なスポーツの祭典であるオリンピック・パラリンピックの理念や知識を身につけ、オリンピックの創始者であるピエール・ド・クーベルタン氏や「日本スポーツの父」と呼ばれる嘉納治五郎氏たちのスポーツについての考え方を学ぶことができた。生徒の感想からも「世界平和」や「知・徳・体」のバランスの大切さ、他国との交流による平和主義や人間形成が現在の体育・スポーツにもつながっていることが理解できていました。また、パラスポーツができた由来やパラリンピックの種目やルールについても理解することができました。今後はそれを支援してくれる生徒がでてくることも期待しています。</p> <p>また、本研究では「心のバリアフリーを生徒に浸透させる」をテーマに行いました。本校教員の授業で行った、障害体験学習だけでも「光がなくなり不安で怖かった。」「目が見えないということは、とても大変なことだと思いました。」「耳からの情報しかなく不安だった、できる限り視覚障害者の方の目になってあげたいと思った。」などの声が聞くことができ、視覚障害者への理解が深まり広い考えを持つことができたのではないかと感じました。「ブラインドサッカー選手との交流会・実技指導」に関しては、ブラインドサッカーについてのルールや視覚がない状態でのサッカーの難しさを体験し理解することができました。そしてなにより、今まで視覚障害者と交流する機会はなかったと思うが、今回視覚障害者である伊藤慎哉氏と会話やブラインドサッカーというスポーツで交流しふれ合うことで、沢山のことを学ぶことができました。また、伊藤氏から最後に話をしてくれた内容にあった、「私は生まれた時から見えないから明るい世界がイメージできない」という言葉から、自分達が視覚障害者の方々に手を差しのべることの大事さを感じることができました。伊藤氏から逆に勇気と希望をもらい、「目が見える私たちだからこそ、伊藤さん以上にもっと運動も勉強も日々の生活も一生懸命生きなければならないと感じました。」というように生きる力をいただくこともできました。また、おとなしく少し自分に自信を持ってない生徒からは「私は今、目が見えなくなったら恐怖で家から出られなくなると思っています。でも伊藤さんは、外出をしたりブラインドサッカーでとてもいきいきしていてすごいと思いました。それを見習い、これからは色々なことにたくさん挑戦していこうと思うことができました。」というように積極的に何事にも挑戦なさっている伊藤氏から生きる術を教えていただいている生徒もいて、「心のバリアフリーを生徒達に浸透させる」ということや人間として勉強になる面が沢山あり有意義な交流会になりました。</p>
---------------	--

<p>7 実践において工夫した点 (事業の特色)</p>	<p>私たち健常者は、障害を持っている方々との接点が少なく街角で見かけても素通りしてしまいがちなところがある。そこを私たちが障害者の立場になって日常生活を体験し、障害者の方々との心のバリアフリーを感じてもらうことができるようにと考え本事業を行いました。</p>
<p>8 主な課題等</p>	<p>今回は1つのクラスだけで行いました。学校全体での取り組みを考えているが、全員参加型にした時の学校内での時間の作り方や取り組む内容について、学校全体の取り組みとしてももう少し考察する必要がある。</p>
<p>9 来年度以降の実施予定</p>	<p>来年度以降の実施については、前回や今年の研究実践を学校独自の取り組みとして位置づけ、オリンピック・パラリンピック教育について発展させたいと考えています。</p>